

まとめ

言語の教育を中核とする学校教育の再創造

言語教育における研究の課題と方法

寺井 私は恐らくこのような話になるのではないかという枠組みを3つほど出しました。

1番目は、国語科の立場からの発言ではございますけれども、国語科教育がどれだけ他教科における言語、言語活動・言語生活あるいは思考などに寄与しているかを検証する。

2番目が他教科における言語活動を国語教育の有効な契機として活用する。この2つ目の点に関しては今日はあまり発言・議論がなかったのではないかという気がしております。

3番目は言語の教育を中核として学校教育の再創造を行う。

1番目に関しましては、実際、今日のお話の中で、単純に語彙を比較するというところだけでは留まらない、という印象を持ちました。つまり、語彙を比較ということはそこにおける思考とか理解のあり方を問うていくことになります。だから、その部分までをいかに視野に入れて語彙を比較できるか、換言すると、単純に語彙の比較だけに留まれば、あまり得るものもないのではないかと。つまり、その語彙がその教科においてどんな意味を持つか、あるいは国語科にとってどんな意味を持つか、というところまでを見通した洞察力というものが必要ではないかと思いました。それから最近教育雑誌等で学習技能という用語が使われているようですが、その中に言語技能と呼んでいいようなものがかかり入っている。そのようなものを整理してみて、国語教育が視野に入れていることとどのように違い、あるいは同じであるかということを検討してみるというのも研究課題ではないかと思えます。それから、更に言語生活というようなものが、他教科でどのように成り立っているかを考えてみて、それを国語科はどのように活用していくかなども考えられるのではないかと、思われます。

2番目の他教科における言語活動を生かすという点ですが、これは総合学習というようなこともありますけれども、例えば、理科で話し合いが行われているのに、その話し合いが有効な話し合いに成り得ているかどうかを検証するのは国語科の議論ではないか。あるいは先ほど甲斐さんがご発言なさったような、社会科で工場見学をすることに関わって新聞を作るというようなことは国語科でもある。これはいずれも国語科の勉強をするチャンスとなっているわけですから、他教科の学習活動において、言語活動をいかに具体化し、質を高めていくか、ということを探るのも研究の領域として設定できるのではないかと、思われます。

3番目の言語教育を中核として学校教育を再創造するというところで、先ほど野村さんより国語の教育が学校教育の全体に関わっているのだというような資料（「指定討論1」図）をご提供いただきましたけれども、実際に言語の教育が学校教育全体に関わっているということを、体系的に研究しているものはあまりないと思われます。その点でやはり、他教科の議論をするならまずと学校全体に議論は広がるはずなので、その視野を持たないといけないだろうと思われます。学校全体を見通すいくつかの観点があると思いますが、言語というのは学校教育全体を見渡す上で中核になる観点ではないか。その意味での学校教育の再創造を図ることが、実は他教科の言語と国語の言語を考えていく上で最終的にたどり着くところではないか、というふうに考えております。

高木 どうもありがとうございました。個人的な感想を一言申し上げますと、やはり他の分野と接触する今日のような機会を持てるということは非常に興味深いですし、また単純に言いますと、楽しいことで、今日私自身もいろいろ学ぶことがございました。そういう意味で今日で終わりということではなくて、今日を機会にこういう視点でもっと研究を交流したり、深めていったりすることができれば、というふうに思われました。これからのまた先生方とこういう機会が持てますことを念じております。どうもありがとうございました。